

---

# まどうし！

影雅 羅尉弥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まどうし！

### 【Nコード】

N9029T

### 【作者名】

影雅 羅尉弥

### 【あらすじ】

魔界から少しずれた世界の城。そこに住まうのは火、氷、土、雷、光、闇の六つの属性を司る6人の少女。あ、魔導師。ぶっちゃけ何の捻りもない日記みたい！ いや、まあ、ちょっとくらいは事件起きると……いいな……

ひゃっ！ シャドウ！ 見えちゃいます！ 見えちゃいますよ！

深夜。広い芝生の庭で踊る二つの影があった。

「『フレイム・ブラスト』！」

燃えるような赤い髪、瞳をした少女がそう叫ぶと、手に魔法陣が現れそこから炎が湧き起こる。

「ちよっ、木に燃え移ったらどうするのよ！ 『クレイ・ウォール』！」

栗色の髪にブラウンの瞳をした少女もそれに応戦するように魔法名を叫ぶ。手に魔法陣が現れ、土で出来た壁が造られる。

「うるさい！ ソイルが私のケーキ落とすのがいけないんだあー！」

「あれはアンタがぶつかってきたんでしょ！」

……訂正。踊ってない。戦っている、というより喧嘩だ。

「とにかくソイルの超越せー！ 『フレイム・アロウ』！」

「だからあたしはもう無いってば！」

ソイルと呼ばれた少女は矢のように飛んでくる火を避けると、手を振りかざした。

『万物の基礎となりし大地よ。我の手足となりし人形を顕現せよ！』

今度は手ではなく、ソイルを中心に地面に魔法陣が現れる。それが発光したかと思うと、大きな土で出来た怪物。つまりはゴーレムが出現。赤髪の少女に向かって拳を振り上げる。

「こんなところで上級魔法使うの！？ 『フレイム・ウォール』！」

炎の壁がゴーレムの拳を遮る。だが、上級魔法だけあって押され気味だ。

徐々に拳が炎を押し分け、魔法が壊されと思った瞬間、

「二人ともいい加減にしなさい！」

城の窓より金髪の少女が飛んでくる。

「うげっ！ ピール！ まだ起きてたの！」

ソイルが慌てて魔法を解く。魔法を解かれたゴーレムはその場に崩れ、土も跡形もなく消えた。

「あなた達が騒がしくて寝られないの！ 二人ともそこまで！ ファイアも自分のせいなんですよ！ 未練がましいことしない！」

「うー、でもっ！」

「でもないの！ またみんなで作ればいいんだから、大人しくしなさい！」

「うー！」

ファイアは駄々をこねる子供のように唸る。

「シャドウも呼びましょうか？」

「うぐ……分かったよー……」

しぶしぶ引き下がるファイア。

「二人とも大人しく寝ること。ソイルもこれ以上は言及しない」

「いや、するつもりないし……」

「むー……。ピールがそういうなら……私はもう寝る」

「はいもう終わり。もう遅いんだから、早く寝なさい」

「「はあーい」」

ソイルとファイアの声が重なる。それを見てピールという少女は満足そうにうなずいた後、元来た窓へと戻っていった。

ここは、普通の魔界からちよつとだけ離れた世界にある普通の城。火、氷、土、雷、光、闇の魔導師が住む城。……まあ、彼女達からすれば、ちよつと広いのだが。

「……ふああ……」

「何ソイル。眠そうだな」

朝食。ソイルの対面に座るのは白い髪に銀の瞳。低身長なのがコンプレックス「光の魔導師」レイだ。

「んー？ まあ昨日少しね……」

「ふーん……？」

「なーなーそれより今日はどうするんだー？」

ファイアが全員に尋ねる。

「あたしはいつも通り午前中は庭のお手入れするわ。……昨日あんなになつたし」

まずソイルが答える。

「オレは特にやることないしなあー。あ、シャドウの図書室いってもいいか？」

「……構わないけど、私の部屋は別に図書室じゃないからね？」

レイの言葉に黒髪黒眼の『闇の魔導師』シャドウが答える。

「あ、じゃあ私も一緒にさせていただいていいですか……？ お城は昨日掃除したばかりですし……」

『氷の魔導師』アイスがおずおずと手を挙げる。

「……いいわよ？ ふふつ。貴女が来るなんて久しぶりね。私も自室で本でも読もうかしら」

「うー……。あ、ピールは？」

「ん？ 私はソイルの手伝いをするつもりだけど？」

「そっかーなるほどー。じゃ私もソイルを手伝うー」

「いいけど、邪魔だけはしないでよね？」

若干顔をひきつらせてソイルが言う。

「しないしないー」

「あれ？ でも今日誰が見張り番だ？」

見張り、とはつまり、簡単に言うとも魔物だ。ずれた世界に迷い込んだ魔物をいち早く見つけるのが見張り番の仕事。

「昨日は……」

「……私よ」

レイの後をシャドウが継ぐ。

「つてことはあたしかあ。……じゃ、ファイアはピールにやること聞いて、余計なことはやらないでよね」

「はいりようかい」

ソイルはそう言い残して見張りに向かった。

「さてじゃあ、私達も行きましょう。ファイアはソイルのお皿も洗いなさいね」

本来は自分の食器は自分で洗うのだが、見張り番だけは他の人が代わりにすることになっている。

「分かってるよー」

ファイアとピールも立ち上がり、食器を洗いに隣の部屋へ向かった。

「うげーまたピーマン入ってるし。シャドウ。頼んだ」

「……頼まれないわ」

ピーマンを挟むレイの手を素早く掴むシャドウ。

「くっ……」

「……好き嫌いはダメよ。ちゃんと食べなさい」

「ちえっ。分かったよ……」

大人しくピーマンを食べるレイ。

「あ、あのお……」

「……ん？ 何？」

「いや……レイ普通にシャドウのお皿に入れてますよ？」

「……え？」

見ると、先程レイが食べていたはずのピーマンがシャドウの皿に移されていた。

「……ほお」

「あっ！ アイス何余計なこと……うっ」

「……そうねえ、貴女光の魔導師だものねえ……幻術だったのねアレ」

「錯覚じゃね？」

「……黙りなさい。さっさと食べなさい」

「了解です」

身の危険を感じたレイは今度こそ自分で食べる。

「……さあ、食べ終えたら行きましょ。ついでに手伝ってほしいし」  
「えー手伝いもかよー。いいけど別に」

そう言いながら、レイは食器を洗いに向かう。

「……アイスも行きましょう」

「あ、はい」

先に立ち上がったシャドウを慌てて追いかけるアイス。

一方その頃である。いや、正確にはシャドウ達が食器を洗っている時。

「良かったじゃない。ファイアの専門分野があつて」

「こんなの望んでないー」

ソイルから庭仕事をバトンタッチされたピール達は今、土を燃やしているところだ。

「なんで私なのぉー」

「仕方ないじゃない。土には植物を喰らう微細性の魔物だっているんだから」

「そんなのどうせ土属性でしょー？ピールがやればいいのに……」

「あら。私じゃファイアも巻き込んだじゃうわ」

さらりと恐ろしいことを言うピール。ファイアは分からないようだが。

「……はい。終わったー」

「よし。とりあえずこの土はもういいとして、次は庭木の手入れよ」

「お、庭師らしい仕事」

「今のも十分庭師の仕事に入るけどね。あっちから順番に手入れするわよ」

「りょうかーい」

まず一番奥の木から手入れを始める。

「あ、ファイア。この枝切っちゃって」

「おっけー」

パチリ、と小気味良い音を立てて枝が切られていく。

「……よし、次の木」

「らじゃー」

順調に切りそろえていくファイアとピール。意外とファイアも器用らしい。

しかし半分ほどいったところで問題が。

「ん？ 何これ」

木とは明らかに違う色の物体。ピールはそれを確認するために枝をどかした。

現れたものは紫色のうねうね動く物体。（寄生性魔物）

「きやあああー!!」

「うにやつ!? どしたピール!」

突っ立って見ていないファイアはピールの悲鳴に何事かと驚く。

「ええい! 気持ち悪っ!」

バツと手を掲げるピール。

「ちよっ待ったピール! 木が死ぬ! ついでに私も!」

先程の言葉はすっかり記憶していたらしい。

「なにこの気持ち悪いの!」

通信用の魔法陣を発動させ、ソイルに連絡をとるピール。

『え? 何が?』

魔法陣からソイルの声。

「あ、そうよね。……えーと、なんか紫色の変なの」

『ああ。簡単に言うくと魔物よ。色からしてまだ幼生体かな?』

「なにそれ……成体とかあんの……」

『うん。とりあえずそうなる前に燃やしちゃって』

「え、ええ……。邪魔したわね」

ピールが魔法を解く。

「じゃあファイア。任せたわ」

「任しとけー!」

木も燃やしてしまわないか心配だ。

……まあ結局、ちよっと木も焦げてしまったが、一応は問題なく



庭木の手入れを終える。

「終わったわね……」

「中々面白いなー庭仕事」

くたくたのピールに対し、ファイアはまだやりたそうな顔だ。

「とりあえず……一回休んで、それからまたやりましょう」

「はい」

所変わって、シャドウの図書室……じゃなくて、部屋。

「おいシャドウー。光の魔導書どこだー」

「……ああ、24ブロック15段、342番から43ブロック4段、182番まで光に関する書物よ」

「ん？ おう……ってだからどこだよ！ どこだよ24ブロックって！」

馬鹿でかい本棚をバツクに叫ぶレイ。

「……何回か来てるんだから覚えなさいよ……。はい地図」

「覚えられっか！」

シャドウから地図をひつたくと本棚の奥に消えていった。

「……はああ……」

「……ん？ どうしたの？ アイス」

「いや……いつきても大きな本棚ですね……レイが図書室っていうのも分かる気がします」

「……貴女までそんなこと……」

「あ、いえ……私は言いませんよ」

シャドウの部屋はとにかく本。というか、本以外ない。いつもどこで寝ているのかと聞きたくなるほどに生活感がない。

「……貴女はどうするの？ 地図ならあるわよ？」

「あ、じゃあそうします」

「……そう。はい」

ありがとうございます。と言ってアイスはその場を離れる。

「……まあでも……」

シャドウはその辺の椅子に座って呟く。

「シャドウー！ 全然分かんないです！」

「……どうせ迷うのよね。あの子は。……分かったわ。ついてきて2ブロックで迷ったアイスがシャドウを呼ぶ。」

シャドウは苦笑しながらアイスの下へ向かった。

「シャドウ、これどこが北でどこが南ですか？」

「……十字書いてあるわよね？」

「……あ、ホントだ」

「……はあ……」

額に手を当てて溜め息をつくシャドウ。

「……う……済みません気付かなくて……」

「……いえ、いいのよ。確かにちよつと小さすぎたっていうのもあるわけだし」

シャドウがそいつた直後、爆音。

「……あれは……レイの仕業ね。ごめんなさいアイス。ちよつと制裁をしてくるわ。待ってて」

「あ、はい。分かりました」

シャドウは軽く手を振ると、軽々と本棚の上に飛び上がった。

「ひゃっ！ シャドウ！ 見えちゃいます！ 見えちゃいますよ！」

「……大丈夫よ。どうせここには女しくないもの」  
そう言ってそのままレイの所へと行ってしまった。

「そういう問題なのでしょうか……」

言いながら、アイスは椅子に腰掛ける。

「……私はどうすればいいんでしょう？」

シャドウがレイの下へつくと、立ち尽くすレイの姿。

「……レイ。何やってるの」

「いや、ちよつと新しい魔法を覚えようと思ってな。失敗した」

周りに本が散乱している。どうやら巻き込んで吹っ飛ばしたらしい。

「……片付けは誰がやると思ってるのよ」

「お前」

即答だった。

「……貴女ねえ……」

どうやって制裁をしようかと考えていると、辺りに魔法陣が浮かぶ。土色に光つているところを見ると、ソイルの通信魔法だろう。

『シャドウ！ 魔物よ魔物！ 光属性だからあんたの出番よ！』

「……分かったわ。レイ。私が帰ってくるまでに片付けること。じゃ」

またもや本棚を飛び移って部屋を出て行った。

「えー、この量をかよー」

一人レイは喚いていた。

「……で？ ソイル。そいつはどこ？」

『えーっと……今はまだ門の前。でもほっとくと入って来ちゃうかも』

「……分かったわ」

長い廊下を走りながらソイルに状況を聞く。

「……久しぶりの私の獲物だものね。たっぷりと楽しませてもらうじゃない」

『……魔物退治を楽しんでるのってあんただけよ』

「……あら？ ソイルは楽しくないの？」

『楽しいワケないでしょ！？ 面倒だし！』

「……そう。まあいいわ。もう切って大丈夫よ」

『はいはい』

それを最後に、ソイルの魔法陣が全て消える。

「……さあて……と」

門前で徘徊している魔物（ドラゴン型）を見つけると、シャドウは思わず笑みを浮かべる。

「……待たせちゃったわね。すぐに……」

手を前に突き出す。そこから真っ黒な魔法陣が現れる。

「……楽にしてあげる！」

言い終わると同時に黒い霧のようなものが凄まじい速さで魔物に向かっていく。

魔物は身を翻してそれを避ける。

……ああ、そっか。説明し忘れてた。『相対属性』っていう理論がある。まあ簡単には火と氷、みたいなやつだ。相対属性の場合はダメージが増えるっていう理論。この場合は光と闇。だから、お互いの被ダメージが増えてしまう諸刃の剣なのだが。

「……どんどん行くわよ……」

両手に別々の魔法陣を浮かべて、まず右手を相手に向ける。

魔法陣から真っ黒な霧が大口径のレーザーの様に魔物に襲いかかる。

ドラゴンは攻撃というより回避に長けた魔物だ。こういう誘導性のない攻撃をかわすことなど容易である。

「……甘いわね」

ここでシャドウは左手の魔法陣を発動。いや、正確には発動させていた魔法陣はトラップ性の魔法だ。条件が揃うことで発動する魔法。

魔物の周りを黒い球体が囲む。それが一斉にはじけた。

「……まだまだ行くわよ！」

それぞれの魔法を解き、先程のトラップで体の一部を破壊された魔物に今度は両手を向ける。

「……これはどうかしらッ！」

大きな魔法陣が現れ、中心に黒い球体を造る。

「……今回は特別に誘導効果も付けてあげるわ……」

黒い霧を吸い込むようにしてどんどん巨大化する黒い球体。魔物

を簡単に飲み込みそうだ。

「……消えなさい」

シャドウがさらに両手を前へと突き出すとその大きな球体は比較的ゆっくりと魔物へ向かっていく。当然、避ける魔物。

だが球体は魔物の方へと方向転換し、また比較的ゆっくりと進んでいく。

「……早く当たればいいのに……」

少し苦しそうな表情を浮かべて言うシャドウ。誘導効果というのは便利な分、単純魔法より魔力を必要とするために魔法を維持することで徐々に体力を奪われていく。

だが、運がいいのか魔物の尻尾部分に黒い球体が当たる。瞬間、その球体は魔物を包み込んだ。

「……ふう。疲れるものね。いじめ殺すのってこっちも疲れるわ……」

いい性格したシャドウは軽く溜め息をつく、開いていた手のひらを閉じた。

黒い球体はそれに呼応するように急激に縮小し、魔物を巻き込んで消滅した。

「……あ、力入れすぎちゃった。ギリギリで止めて断末魔くらいさせてあげようかと思ったのに……」

いい性格も考え物だ。

「……さて、レイ。これは一体どういう事かしら」

「さあ？」

「……平然ととぼけるんじゃない」

シャドウの部屋に戻ってみれば、ひどい有り様だった。もう散らかっているとかじゃない。まさしくカオス。

「いや、一回片付け終わったんでもう一回やってみようかと……」

「……外でやるうとか思わなかったの？」

その手があったか、と言いたげにポンと手を打つレイ。

「……いいわ。貴女は私が一から教育し直してあげる」

「いや間に合って……っていたたた！ 悪かった！ 悪かったから  
離せ！」

そんな悲鳴を残してレイとシャドウは部屋を後にした。

……もう一人いたことなど忘れて。

「……うう……遅いです……どうしちゃったんでしょう……？」

椅子から立ち上がり、辺りを行ったり来たり。

「……まさか……忘れて……わひゃっ！」

何も無いところでアイスは転ぶ。それがドジっ子のお約束。

居もしない魔物来襲報告してやろうかしら！

「そっそんなことより、アイスはいいのか！？」

「……え？」

「お前の部屋に取り残されてんぞ」

「……あつ」

レイの言葉でようやく思い出したシャドウは怪しげな魔導書を閉じ、自分の部屋へと走り出す。

「……レイはそこから抜け出せたら許してあげる」

「ええ！？ 無理だろこんなん！ あつちよ！」

レイは手と足を黒い霧に包まれ、身動きがとれないでいる。

「手もふさがれてちゃ魔法も使えないじゃねえかよお……」

とりあえずゴロゴロ転がってみるレイだった。

「……すっかり忘れていたわ……」

レイではなく、魔物のせいとは口が裂けても言えないだろう。

「……それにあの子絶対なにかやらかしそうだし……まあ、可愛いかから許すけど」

可愛いつて永遠の正義よねーとか、そんな事を思いつつ部屋のドアを開ける。

「……あの場所にいるのかしら……」

先程待たせた場所に向かう。だが、アイスの姿はなかった。

「……一体どこに……」

「あ！ シャドウ！ 遅かったですね！」

搜索魔法でも使おうかと思っていたとき、声がかかった。

「……アイス……一体どういう状況なのよ……」

「いえ……とりあえずは自分で見つけられたんですけど、高くて……」

……」

アイスは本を何冊も積み上げてその上に座っていた。17段目なのでかなり不安定。というか、良くそこまで積み上げたものだ。

「……あっちに梯子あるわよね？」

「え、そうなんですか？　じゃとりあえず……ひゃっ！」

まあ、当然バランスを崩すわけで。大量の本と共にアイスが落ちこちてくる。

「……あ、はは……結局こうなるのね……」

覚悟を決めたように、そんな事を言い残すシャドウ。

バサバサッにドシャツという二連コンボで、少し埃が舞う。

「……いたたた……大丈夫です……か」

アイスが何かに気付く。

「……痛いわね全く……」

そこまで言ってシャドウも口を噤む。

「……えーつと……アイス」

「はっはい！」

「……何かしらこの手は？」

落ちる時にシャドウがクッションになったらしい。シャドウの上にアイスが覆い被さるようにして倒れていた。それはいい。問題はアイスの置かれた手。しっかりとある部分を掴んでいたのだ。……シャドウの、胸を。

「ひう！　すすす済みません！　ホントに！」

慌てて手を離すアイス。

「……まあ、別にいいんだけどね。減るもんじゃないし。つか減るもんってなによ？」

「あう……」

真っ赤になってアイスは俯く。

「……それと、そろそろ起き上がってもらっていいかしら？　貴女にその気があるのなら別だけど」

「なっ、ちっ違います！　すぐ起きます！」

急いで起き上がり、シャドウから離れる。



「……そう……その気はないのね……」

「なんで残念そうにしてるんですかつ！」

「……ふふ、冗談よ冗談」

シャドウも起き上がる。

「……さて、片付けましょうか……」

「あっはい！ 済みませんご迷惑をお掛けして……」

「……いいわ。慣れっこだしね」

とりあえずその辺の本を拾い上げるシャドウ。

「……大体の本は13ブロックのものね？」

「あ、はい。隣の本棚です」

アイスも拾って一カ所にまとめる。

「……あ、貴女が持つと……」

持ち上げようとするアイスをやりわり止めようとする。

「大丈夫です……ひゃあ！」

バランスを崩し、あえなく転倒。

「……はあ……」

「ごめんなさいごめんなさい……」

「……いいわよ。もう一度まとめればいいのだし。持ち上げなくていいけどね」

「うう……ごめんなさい……」

「……何回も謝らないの。ほら立って」

シャドウが手を伸ばす。アイスがそれを取ると、シャドウはアイスの手を引っ張った。

「……なんでいつも失敗しちゃうんでしょう……」

「……もうそういう性格なのよね。仕方ないことよ」

どっちかっていうと属性よね、と心の中で付け足す。

「性格……そうなんですか……」

「……嫌なの？ そういう性格」

「いえ、そういう訳じゃ……」

シャドウはいまいち要領を得ない、といった顔だ。

「まあ、これだけ人が集まってるんですもんね。色んな性格がいて当然ですよ」

「……六人だけだね」

「細かいことはいいんです！」

「そういうものかしら……、とシャドウは顎に手をやる。

「……ってそれはいいのよ。早く片付けましょう」

「あ、そうでしたね」

アイスと二人で片付ける。

「……じゃあ、あの梯子使っていいから。何かあったら呼んでね」  
「分かりました」

アイスの下を離れ、レイの所へ戻る。

「……どうせレイじゃ抜け出せるはずないもの。急がなくちゃ」  
「何だかんだ言ってやはりレイが気になるらしい。

扉を開けて中へ入る。

「……あ」

床に寝っ転がって眠るレイの姿。魔法は相変わらず掛けられたまままだ。

「……ホント、子供ねえ……」

溜め息をつきながらレイの手足の魔法を解き、抱き上げる。

「……どこに寝かせておこうかしら……」

とりあえずレイの部屋へおいておこうとする。

「……んー……ふああ……」

「……あ、起きた？」

眠い目を擦りながら目を覚ますレイ。

「……あれ？　なんでオレ運ばれてんの？」

「いまいち回らない頭を回して考えるレイははっと何かに気付く。

「うおう！？　まさかアレか！？　まさかオレにさらなる教育を施そうというのか！？」

「……やってあげようか？」

「ちよっただけ心配した私がバカだったわ……。とシャドウはそん

な事を思っただった。

シャドウが本の襲撃を受けていた頃、ピール達にも新たな試練が待ち受けていた。

「ほらほらファイア。早く運んで」

「うー！　なんで私ばかり重労働なんだあー！」

少し前に焼いた土を運んでいるところだった。

「いいじゃない。私と比べたらファイアの方が力持ちだしね」

「でもこんなの地味ー！　もつとなんか花に水あげたり雑草刈ったり邪魔な枝ぶった斬ったりとか！」

「ファイアの中では物騒な仕事なんだね。庭師って。そしてそれはもうやったよね？」

「とにかくとにかく！　もうちょっと面白いものはないのかっ！」  
握り拳して熱演。

「どこの主人公なのそれ。ていうかこれ終われば水やりなんだから我慢なんて」

「おお！　じゃ急ぐぜ善は急げー！」  
土を運んでいるとは思えないスピードで走り去るファイア。

「……急いでどうするの……っていうかあの子運ぶ場所分かってんのかな？」

「早くしろーピール！」

「あーはいはい！　あんまり先行かないでよねー！」

結局ファイアの後を追うこととなったピールである。

そしてさらに同時刻。見張りの部屋と扉に掛けられた札。つまりはソイルが見張りを行っている部屋だ。

「……ふあああ……眠……」

暇そうに庭でのファイア達の騒ぎを見ているソイル。

「……ホント、ファイア失敗したりしないでしょうねえ……」

ボーツと、すごい勢いで荷車を引くファイアを見ながら呟く。

「ま、ピールもいるし大丈夫よね。……ん……はあ……」

大きく伸びをして、見張り再開。

「……ていうかさあー……魔物なんてそう簡単に来ないっつの……」

先程来たのは棚にダンクシユートである。

「それにしても暇だわ……暇潰しにファイアに上級魔法使ってやる  
うかしら……」

酷い暇潰しだ。

「っていうかそう！ 昨日のもファイアのせいなのにファイアには  
追っかけられるわピールには怒られるわ、ホント意味分かんないっ  
！」

根に持っているようだ。

「つーかそうよ！ そもそもファイアがケーキの皿もって走り回る  
のがいけないのよ！ 『部屋で食べたかったのにー！』とか子供か  
あいつは！ バツカじゃないの！」

どうやら頭は完全に昨日のことへとシフトしているらしい。愚痴  
にしか聞こえないのは内緒だ。

「あーもうなんか腹立ってきた！ もう居もしない魔物来襲報告し  
てやるうかしら！」

それじゃただの八つ当たり。

「……あ」

シャドウが思い出した様に声を上げる。

「どうした。シャドウ」

「どうしたんですか？」

質問するのはレイとアイス。……ソイルは怖いので放っておこう。

「……お昼ご飯作らなきゃと思って」

「あーそうか。じゃシャドウがんば」

「……貴女達もやるのよ」

「私ですかあ!？」

当然、といった感じで頷くシャドウ。

「……こんなちびっ子と二人なんて不安でたまらないわ」

「うっせ！」

「ま、まあとにかく！ 私でいいなら手伝います」

いがむレイを落ち着かせながらシャドウに言う。

「……ありがと。じゃあそうと決まれば早速行きましょう」

そう言って歩き出すシャドウとアイス。

「なあオレ、行くなって言っていないよな？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9029t/>

---

まどうし！

2011年6月12日23時11分発行